



日本とちょっと違うよ - 通訳者よもやま話 - Vol.18 中国語担当 劉さん

病院で案内表示があるのに見ようともせず、いろいろな場所を聞いてくる外国人の患者さんに会ったことはありませんか？ 私の経験から言うと、中国では病院の中が迷路のようになっているので、それが「よく場所を聞く患者さん」たちの背景にあると思います。

私が中国にいた頃、病院には案内表示や地図がなく、患者さんがよく迷子になっていました。全面が木の扉で閉鎖された空間が廊下に並んでいるため、看板を見ないと何の部屋なのかも分かりません。母が医療従事者だったので、私は小学生の頃から母の職場によく行き、代わりに患者さんたちの案内役を担当していました。私がいると、依頼を片付けるスピードが格段に早まるので、母も喜んで褒めてくれました。案内役がいなければどうなる事でしょう？それは聞くしかありません。患者さんは手当たり次第、スタッフ達に場所を聞き、指示を出すのに忙しい医師や看護師は「近くにいるスタッフに聞いてください」と案内します。病院の中で、あちこち聞いて回るのが中国の患者にとって当たり前のことなのです。日本に来て、私は病院の壁や床に貼ってある矢印に驚きました。どこへ行っても地図があることや、病室がガラス張りやカーテンで仕切られていること、オープンナースステーションのことも、全部新鮮で珍しい体験でした。

写真の黄色い建物は 30 年前の病院外来部です。今はデパートになっていて、ハルビン市の建築文化遺産として昔の姿のままに大事に残されています。



30 年前の病院外来部



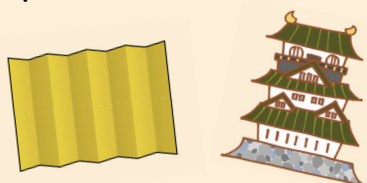
現在の病院

こぼれ話 ~ カステラ? ~



スペイン語由来の外来語で「カステラ」は有名ですが、こんな話があります。初めてカステラを食べた日本人があまりの美味しさにペロリとたいらげ、「これは何というのですか？」とお皿を指さして尋ねました。聞かれたスペイン人は空になったお皿に描かれていたお城の絵のことだと思い「カスティージョ」と答えました。これが「カステラ」になったとか…本当は、スペイン語でカステラは「ビスコッチョ」という名前のお菓子だそうです。

逆に外行語としては「屏風(びょうぶ)」があるそうです。初めて日本で屏風を見たスペイン人が本国へ持ち帰って、言葉は海を渡りスペイン語の「ピオンボ」になりました。いずれも 16 世紀のお話です！



今月のトピックス



「世界に羽ばたく日本語」

先ごろ、世界的に権威のあるオックスフォード英語辞典に、新たに 23 単語の日本語が追加されたことがニュースになりました。古くは「サムライ」「ゲイシャ」「フジヤマ」など、いかにも JAPAN！な言葉たちが並んでいましたが、最近のグローバル化を反映して、年々掲載語は増えていき、最先端のサブカルチャー、アニメなどから「isekai(異世界)」「tokusatsu(特撮)」があったり、特に今回の追加にはたくさんさんの日本グルメが選ばれました。「karaage」「katsu curry」「okonomiyaki」「takoyaki」「onigiri」などなど… 私たち日本人にとって普通のこと、世界基準で普通となったように感じました。

一方、日本の伝統的なものも世界に認識され、「kintsugi(金継ぎ)」などの日本人でも非日常的なものが採用されたことも目を引きました。「santoku(三徳:三徳包丁)」も今回採用され、日本に来て、切れ味がよく使い勝手のいい包丁を購入する外国の方がたくさんいらっしゃるのと、日本人として、うちの包丁も研いであげないと！と思わされますね。

外国から来て日本に定着した言葉を「外来語」と言い、反対に外国に行って定着した日本語を「外行語」と呼ぶ人もいます。いずれにしても言葉は、その国の文化を乗せて世界に羽ばたくというわけです。

